

自閉性障害児童への日常での実施を促す料理指導の検討

Teaching children with autism to cook: generalization to daily setting

神山 努

KAMIYAMA Tsutomu

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

National Institute of Special Needs Education

Key words: 自閉性障害児, 料理指導, 放課後支援

目的

本研究は児童デイサービスにおいて、自閉性障害がある小学生に対する料理教室を実施し、参加児童の料理スキルの獲得と、保護者の記録から対象児が日常で料理を実施できたかどうかについて検討することを目的とした。

方法

対象 医療機関において自閉性障害と診断された、特別支援学校小学部5年または6年に在籍する児童4名が参加した。いずれの児童も1、2語文程度で発話し、簡単な指示に従うことはできた。また、本研究開始時までに学校での調理実習や、家庭で料理を手伝った経験があった。本研究にあたり、本研究に関する内容について保護者に説明し、研究参加の同意を得た。

設定 放課後の時間帯に1回2時間を月2回行った。2名の指導員が教室の運営を行った。

教材 井上ら(1994)を参考に、料理手順を課題分析した各下位行動が、1枚ずつ示された写真をリングで綴じた料理カードを使用した。各写真にはその工程を示す2～3語文程度の文章が記載された。

指導手続き 指導品目は保護者の聞き取りから選定し、2回指導するごとに変更した。指導の開始は、あらかじめ料理カード、材料、用具を調理場に用意しておき、「〇〇(料理名)を作って下さい」と教示した。料理工程を課題分析した各下位行動において、カードをめくってその工程のカードを指差して見ることと、カードに示された行動を正しく遂行することを標的とした。各下位行動において正反応を示した場合は言語賞賛を提示し、誤反応または3秒の無反応には指さし、モデル、身体ガイダンスなどの援助を提示した。なお、カードを参照せずにその料理工程を正しく行った場合は、カードを参照することを促さなかった。

また、教室で料理した品目の日常場面での実施を促すために、毎回の教室が終了した時に、指導の様子について記録を用いて保護者に説明した。また、その品目で用いた料理カードと、家庭で料理した様子を記録する用紙

を配付した。記録用紙はA4サイズであり、1回の料理につき1枚使用することとした。記録内容は日時や、その品目の各下位行動での援助の有無を記録してもらった。記録結果を次の教室時に持参してもらい、記録結果をもとに必要な援助について話し合った。

結果

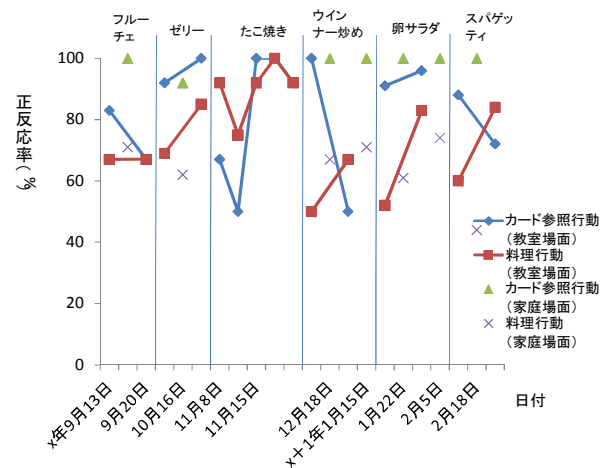


Fig. 1 対象児1名の教室場面および家庭場面における料理行動の推移

対象児のうち1名の、教室場面および家庭場面での料理行動の推移を Fig.1 に示した。教室では、いずれの品目も2回目には60%以上の正反応率を示した。また、家庭においても教室とほぼ同等の正反応率を示した。

考察

本研究の結果から、料理カードを用いた月2回の料理教室が、自閉性障害児童の料理スキルの獲得や、家庭での取り組みを促すことが示された。記録を用いて、教室と家庭での料理の様子について、保護者と情報交換したことが有効であったと考えられる。今後の課題として、教室終了後に家庭で料理の実施が維持されるかどうかの検討などが挙げられる。